仲島本間尺・唐土遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第72集 —

2007

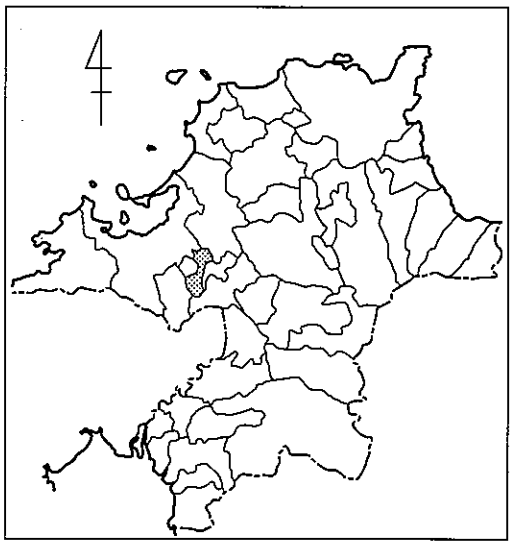
大 野 城 市 教 育 委 員 会

なかしまほんげんじゃく　　もろこし

仲島本間尺・唐土遺跡

大野城市文化財調査報告書

— 第72集 —



2007

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の一角にあり、さまざまな文化財に恵まれた街です。本市教育委員会では各種開発に先立って多くの発掘調査を実施してきました。発掘調査が多く、整理作業に時間を要したため、報告書の刊行が遅れる結果になりました。
今回ご報告する唐土遺跡は平成元年、仲島本間尺遺跡は平成３年に発掘調査を行ったものですが、どちらも整理作業が遅れて未報告になっていたものです。このたび、整理作業を委託し、報告書の刊行に至りました。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、当地域の古代史の一端が明らかになることを願っております。

最後に、発掘調査費負担のご協力をいただきました土地所有者や、調査に対してご協力をいただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成１９年３月３１日

大野城市教育委員会
教育長　古賀　宮太

例　　言

１．本書は、大野城市教育委員会が実施した仲島本間尺遺跡・唐土遺跡の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は民間の事務所や共同住宅の建設に伴って実施したものである。

３．両遺跡の整理作業は入札によって特定非営利活動法人文化財保存活用支援センターに委託し、大野城市教育委員会舟山良一が検査を行った。

４．「Ⅰ．はじめに」と「Ⅳ．まとめ」の一部を舟山が執筆したが、その他はすべて受託者が行った．

５．本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の 2.5 万分の１地形図『福岡南部』･『大宰府』を使用した。

仲島本間尺遺跡

仲島本間尺遺跡本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の結果 …… 6
　1．調査概要 …… 6
　2．遺構と遺物 …… 7
Ⅳ．まとめ …… 13

仲島本間尺遺跡表目次

1．仲島本間尺遺跡出土土器法量表 …… 12

仲島本間尺遺跡図版目次

図版 1　（1）仲島本間尺遺跡調査地全景（南から）
　　（2）仲島本間尺遺跡調査前全景（南から）
図版 2　仲島本間尺遺跡出土遺物　（3 ～ 14）
図版 3　仲島本間尺遺跡出土遺物　（14 ～ 19）
図版 4　仲島本間尺遺跡出土遺物　（20 ～ 25）

仲島本間尺遺跡挿図目次

第１図．周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 2
第２図．仲島本間尺遺跡位置図（1/5,000） …… 4
第３図．仲島本間尺遺跡位置図（1/500） …… 5
第４図．遺構配置図（1/100） …… 6
第５図．SD01・SD02・SD03・SD04 実測図（1/40） …… 7
第６図．SD02 出土土器実測図（1/3） …… 8
第７図．SD04 出土土器実測図（1/3） …… 9
第８図．遺構検出面出土土器実測図（1/3・1/4） …… 10
第９図．遺構検出面出土遺物実測図（1/4・2/3） …… 11

Ⅰ．はじめに

仲島本間尺遺跡は1980年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』には190231仲島周辺遺跡として登録されている遺跡に含まれるが、この地域の発掘調査が進むにつれて別の遺跡とした方が良いと判断し、名付けた遺跡である。事務所建設のため試掘調査を実施したところ遺構が見つかり発掘調査したものである。開発面積は1,250㎡であったが、開発によって遺構に影響のある200 ㎡を発掘調査した。調査は1991年（平成3年）7月25日から9月30日まで行った。

発掘調査は平成３年に技師向直也を中心にして実施したが、整理作業は2006年（平成１８年度）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	古賀　宮太
	教育部長	小嶋　健
	ふるさと文化財課長	舟山　良一
	文化財担当係長	中山　宏
	主査	徳本　洋一
	〃	石木　秀啓
	〃	丸尾　博恵
	主任技師	林　　潤也
	〃	早瀬　賢
	嘱託	井上　愛子
	〃	北川　貴洋
	〃	城門　義廣
	〃	岡田　裕之

発掘調査に際しては、調査費の負担のご協力を得た地権者に厚く感謝の意を表します。

第１図　周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 仲島本間尺遺跡	2. 仲島遺跡	3. 井相田遺跡	4. 持田ヶ浦古墳群	5. 御陵古墳群	6. 王城山古墳
7. 古野古墳	8. 森園遺跡	9. 中・寺尾遺跡	10. 村下遺跡	11. 雑餉隈遺跡群	12. 石勺遺跡
13. 九州大学構内遺跡	14. 駿河遺跡	15. 瑞穂遺跡	16. 笹原古墳	17. 成屋形古墳	18. 唐土遺跡
19. 谷川遺跡	20. 梅頭窯跡	21. 上園遺跡	22. 水城跡	23. 島本遺跡	24. 神ノ前遺跡

Ⅱ．　位置と環境

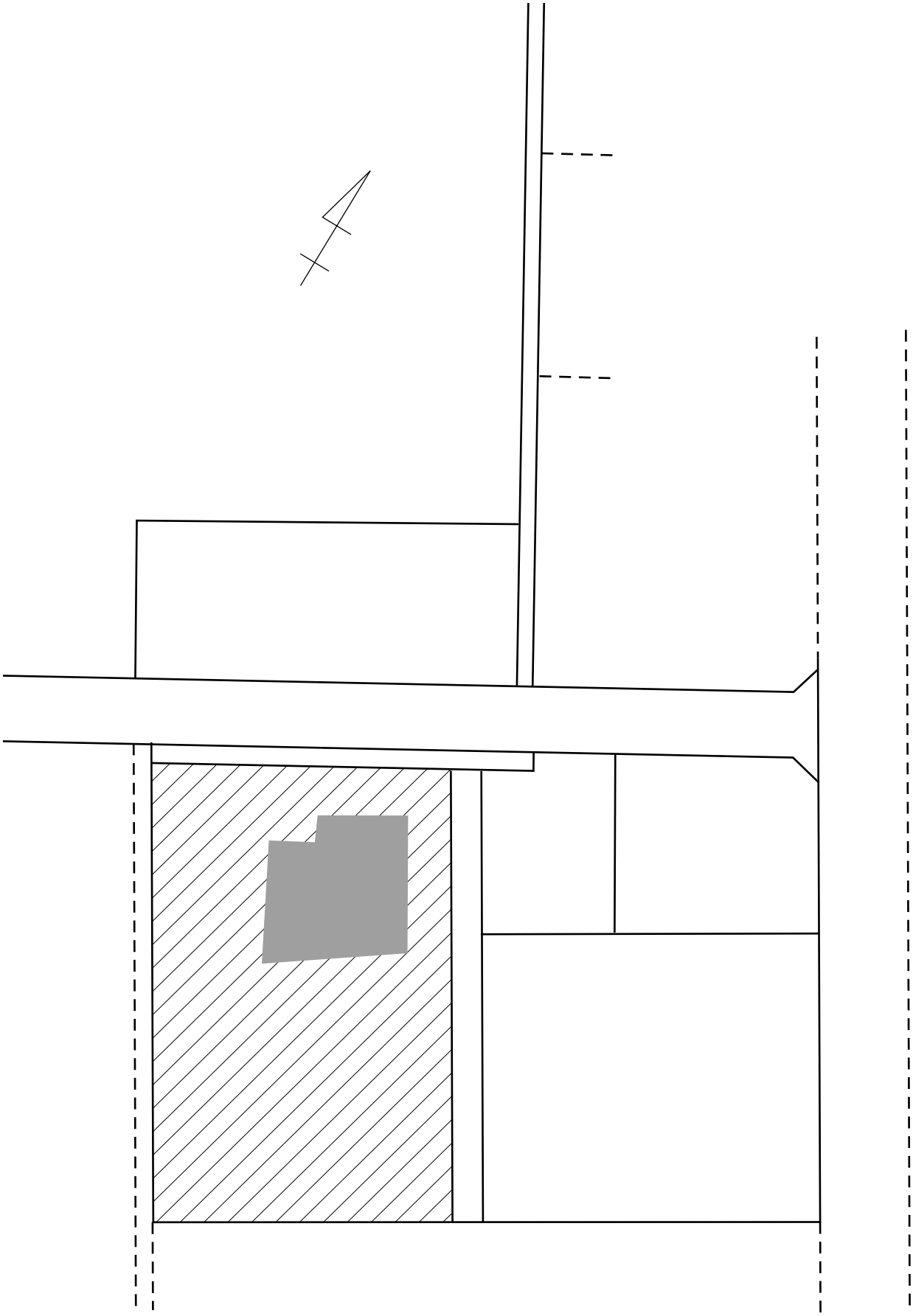
大野城市は福岡平野の南に位置し、南北に細長く中央部でくびれた形をしている。中央部を国道３号線、ＪＲ鹿児島本線、西鉄大牟田線が平行して通り交通の要衝となっている。地形をみると北東部に三郡山塊周縁部の井野山、乙金山、大城山が連なっている。山麓から平地丘陵部にかけて畑地や水田が広がり豊かな自然を形成していたが。昭和４０年代から福岡市のベッドタウンとして急激に開発され、現在では商業地や住宅地になっている。また三郡山塊の宝満山に源を発する御笠川が市域の中央部を南西に貫流し市の北西部で牛頸川と合流、さらに福岡市に入って諸岡川と合流、博多湾へ注いでいる。諸岡川と御笠川に挟まれた沖積平野の東部に位置する仲畑地区に仲島本間尺遺跡が所在している。仲島本間尺遺跡では溝が調査され古墳時代後期の土器が出土している。その２５０m南には仲島遺跡が所在する。仲島遺跡は弥生時代から奈良時代にいたる複合遺跡として知られ、古墳時代の住居跡や掘立柱建物も確認されている。隣接する福岡市の井相田遺跡もあわせて

仲島本間尺遺跡との関連性が考えられる。また、市域の南東から北西丘陵地帯に沿って古墳群が散在している。仲島本間尺遺跡東方１ｋｍの月隈丘陵から乙金山麓にかけ持田ヶ浦古墳群が所在し、５世紀前後～と推定される墳墓が１００基近く発掘されている。持田ヶ浦古墳群の南に御陵古墳群が所在、さらに御陵古墳群の東南東１ｋｍの乙金山麓に王城山・古野古墳群が所在している。王城山・古野古墳群は６～７世紀にかけて築造され、王城山古墳からは新羅土器が出土している。
仲島本間尺遺跡の南東４ｋｍの大城山山麓から低地丘陵部にかけて、笹原古墳や隣接する太宰府市に成屋形古墳が所在する。前者は 5 世紀前半、後者は 5 世紀後半の築造と推定され、成屋形古墳は帆立貝式前方後円墳という特殊な形をもっていることで知られる。

市域の南西部の牛頸山麓は背振山塊北東周縁部に属し、須恵器の窯跡群が展開している。牛頸山麓の須恵器の生産は 6 世紀中頃から平安時代におよび、窯跡は５００基有余、西日本最大の規模を誇っている。牛頸窯跡群中最古の窯と推定される野添 6 号窯は 6 世紀中ごろ操業の窯である。また、平野川の谷筋の平地には 5 世紀から 12 世紀にかけて継続する集落遺跡として上園遺跡がある。

唐土遺跡は下大利 4 丁目に所在する。唐土遺跡南東には 7 世紀に築造された水城の西門があり、大宰府政庁から鴻臚館へ至る官道が通っている。水城西門から北西２００ｍに谷川遺跡が所在しており官道の側溝が確認されている。さらに水城西門から南東１８０ｍに太宰府市島本遺跡、その南東１ｋｍに所在する前田遺跡でも古代の官道跡が調査され、水城の西門ルートとして注目されている。また唐土遺跡からの出土品は須恵器の割合が多く牛頸窯跡群との接点が注目される。今後の課題として周辺遺跡や古代大宰府との関連、須恵器生産の変遷などの解明が期待される。

第2図　仲島本間尺遺跡位置図（1/5,000）

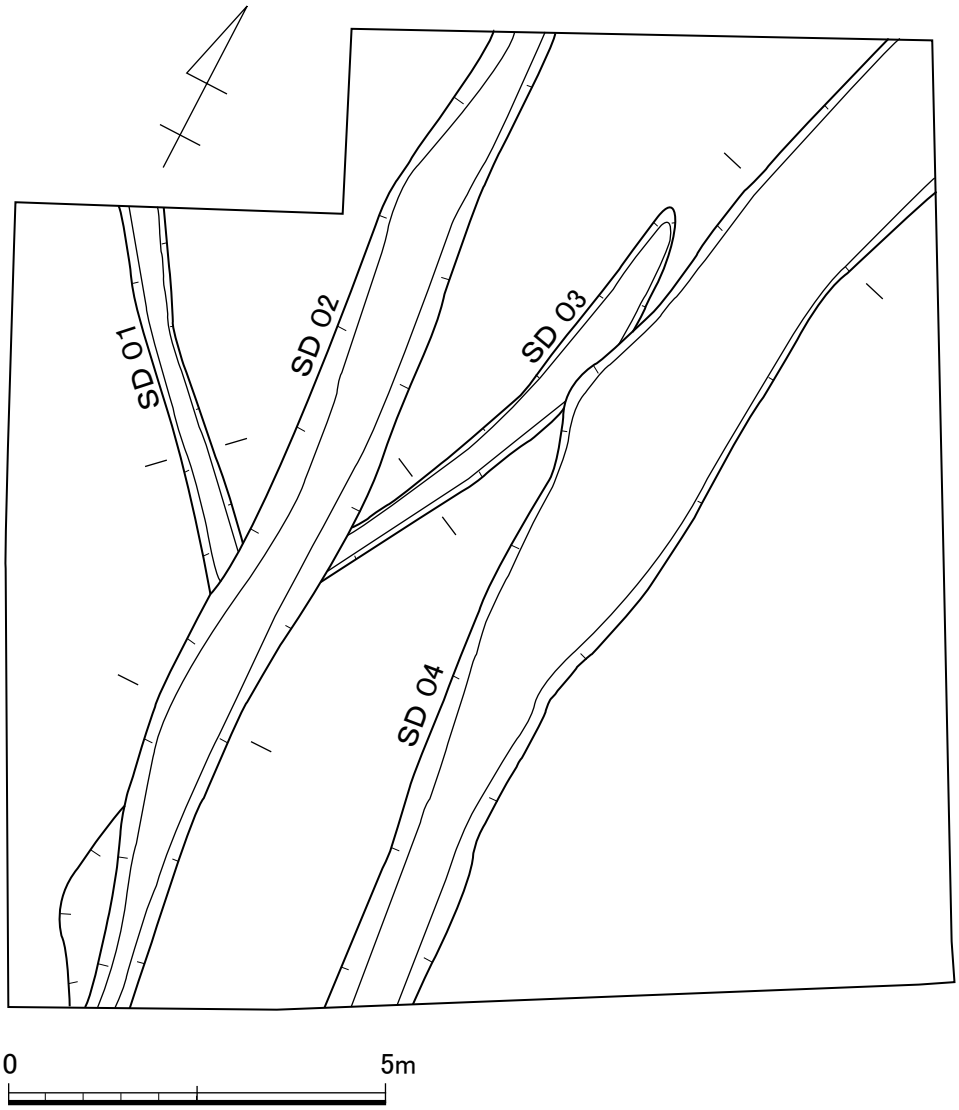


第3図　仲島本間尺遺跡位置図（1/500）

Ⅲ．　調査の結果

1　　調査概要

試掘調査で開発予定地の北東側には遺構の存在が確認されたが、遺構に影響のある 200 ㎡の発掘調査を行った。調査地は盛土が多く遺構面まで 1.5m 以上の深さがあったので、土砂の崩壊を防ぐため勾配をつけて掘削した。検出された遺構は溝 4 条でほぼ南北に伸びる 2 条と、それと切りあう 2 条の小溝である。遺物は南北溝から古墳時代後期のものが出土している。



第 4 図　遺構配置図 (1/100)

2　　遺構と遺物

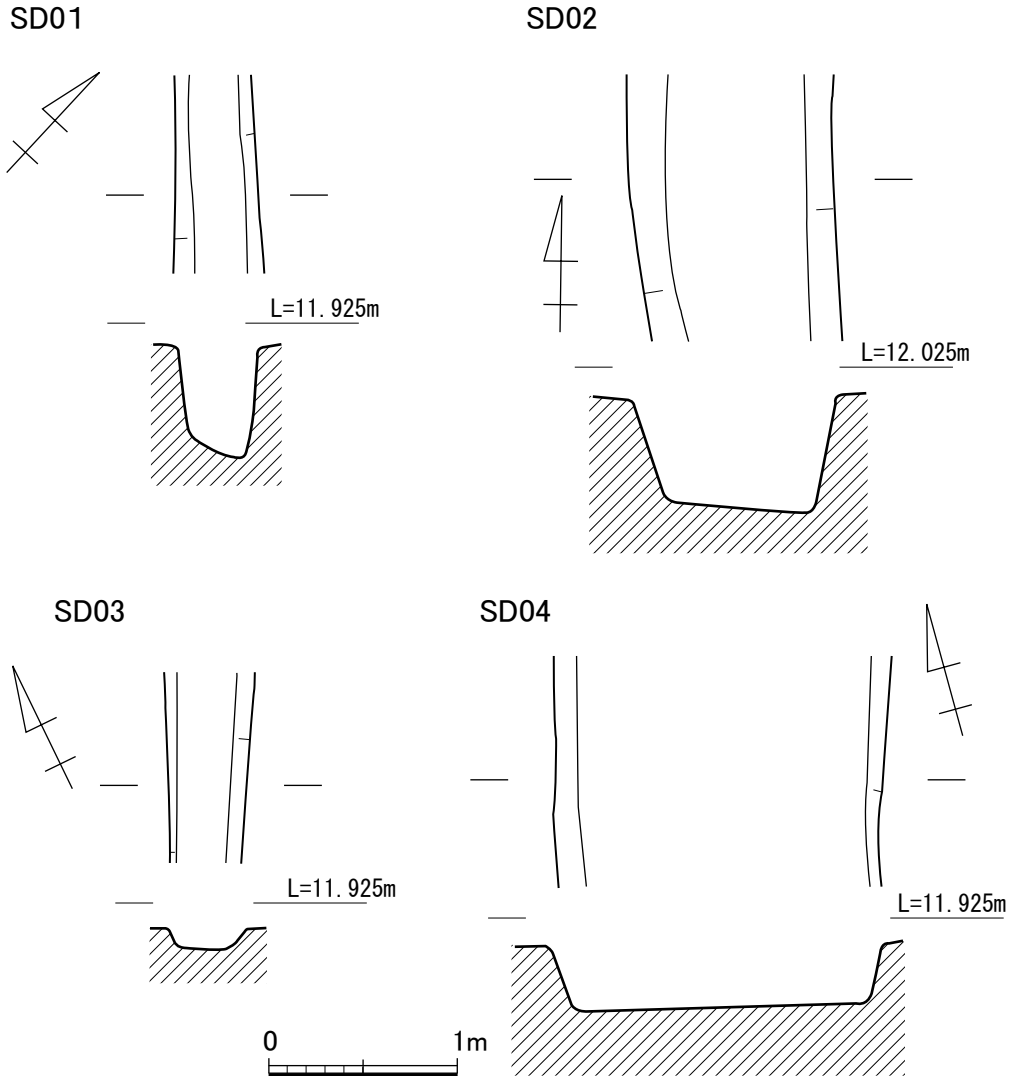
溝

ＳＤ 01

幅 40 ～ 50cm、深さ 40cm の溝で、SD02 と切りあっているが先後関係はわからない。遺物も出土しておらず時期は不明である。

ＳＤ 02

調査区をほぼ南北に走る溝が 2 条検出されているが、その西側の溝である。幅約 0.9 ～ 1.2m、深さは 50 ～ 70cm である。SD04 とほぼ並行して南北に掘られている。SD03 との先後関係はわからない。



第 5 図　SD01・SD02・SD03・SD04 実測図 (1/40)

ＳＤ 03

SD03 は SD04 にきられている。幅 40 ～ 70cm、深さ 10cm の浅い溝で SD02 との先後関係は不明。北端は消失しているが、後世に削平されたためであろう。ここからは遺物は出土していない。

ＳＤ 04

SD04 は SD02 から東側に約 2m 離れて南北に掘られている。幅 1 ～ 1.7m、深さ約 30cm の溝で、SD02 と同様古墳時代後期の須恵器、土師器が出土している。SD02 と SD04 は調査区の南側にさらに伸びているが、試掘調査時に南側から 5m 離れた地点では溝は確認されていない。おそらく、溝は調査区の南側に出たところで東側に曲がっていくと想定される。

ＳＤ 02 出土遺物　（第 6 図、図版 2）

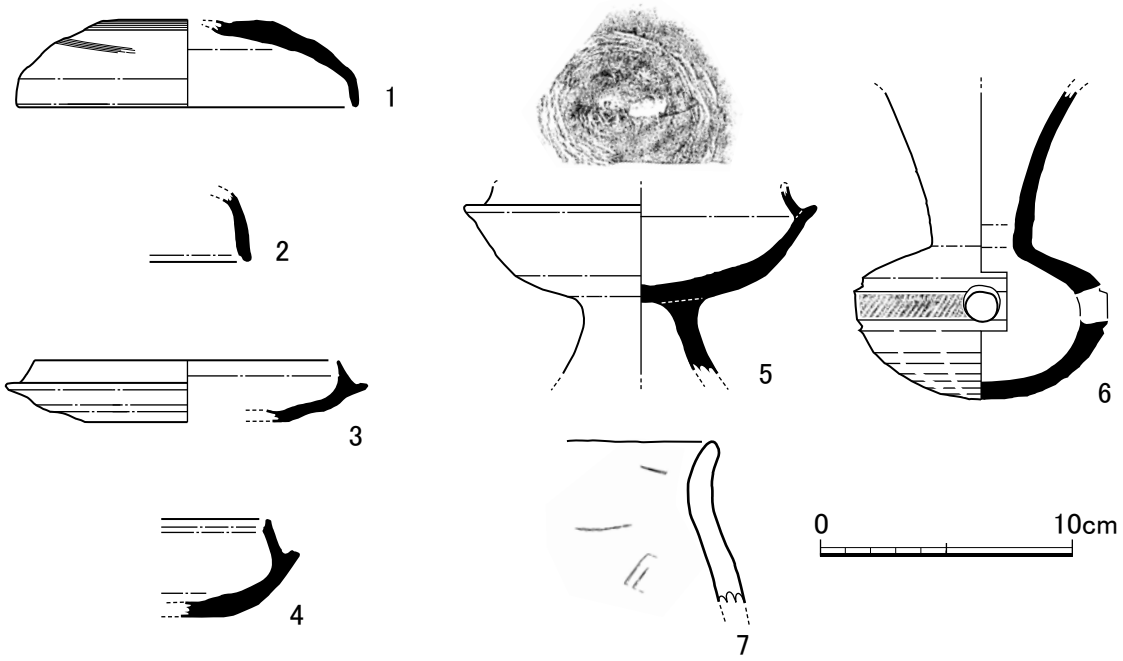
須恵器

杯蓋　（ 1・2 ）　1 は口径 13.6cm を測り、天井部の一部に粗くかき目を施している。口縁部は回転ナデ成形である。口縁端部に段は無く、丸く納める。２は口縁部破片。天井部との境界に浅い凹線が残り、口縁端部内側にも段が巡る。

杯身　（ 3 ・4 ）　3 は復元で口径 12.2cm、受部径 14.3cm を測る。残存部は少ないが浅めの杯身で焼成時の被熱により外面は灰がかぶり、調整は不明である。4 も残存はわずかであるが、受部から口縁までが高く、口縁端部には浅いが段がつく。外面の調整は口縁部付近まで回転ヘラ削りを施す。器高は 3.9cm 前後。

高杯　（ 5 ）　口縁端部と脚底部を欠損するが、受部径 14.0cm を測る。杯部の底部は回転ヘラ削りを施し、底部内面中央部に当具痕が残るが一部をナデ消している。

ハソウ　（ 6 ）　球体部の最大径 10.0cm。球体部と頸部の境は径 4.0cm である。円孔部上下端の位



第 6 図　SD02 出土土器実測図 (1/3)

置にそれぞれ沈線を施し、その間を斜め方向の刺突文帯を巡らし、底部から刺突文帯まで回転ヘラ削り調整を丁寧に行っている。口縁部は回転ナデされ外側に直線的に開く。口縁部上部を欠損。

土師器

甕　（７）　体部から口縁部までの破片。磨耗しており調整は不明。口縁はほぼ直線的に立ち上がり、わずかに端部で外反する。体部内面はヘラ削りされる。口縁部直下は粘土紐の痕跡が観察できる。

ＳＤ04　出土遺物　（第７図、図版2）

須恵器

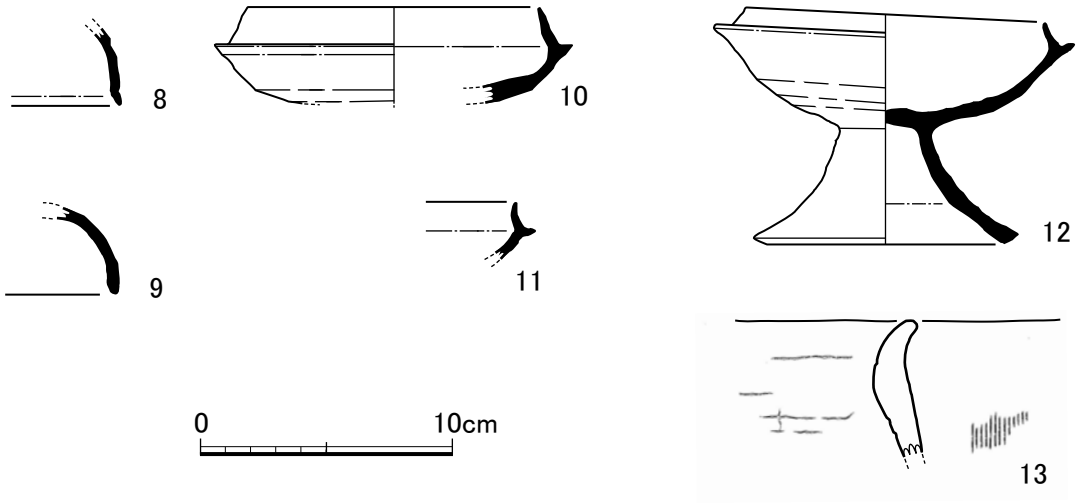
杯蓋　（８・９）　いずれも口縁部の小片で８は天井部と口縁部の境界に浅い段をもつ。口縁端部の内側にも段がある。9は体部から口縁まで丸みをもった形状で、口縁端部に段は見られず、丸く納めている。

杯身　（10　・11）　１０は口径11.6cm、受部径14.2cmを測る。口縁部は長く内傾し、底部は回転ヘラ削りを行っている。外面は被熱のため器面が荒れている。11は口縁部小片で口縁部を回転ナデ調整する。

高杯　（12）　口径12.0cm、受部14.3cm、器高9.1cmを測る。杯部はやや傾いて脚部に取り付く。杯部の底部から口縁にかけて回転ヘラ削りを施している。他は回転ナデ調整され、口縁部の立ち上がりは短く内傾する。

土師器

甕　（13）　口縁部の小片である。口縁部内側が肥厚して、端部はわずかに外反する。口縁部は横ナデ調整され、体部外面にはハケ調整を行っている。内面は磨耗して調整は不明だが、粘土紐を接合した痕跡が観察できる。

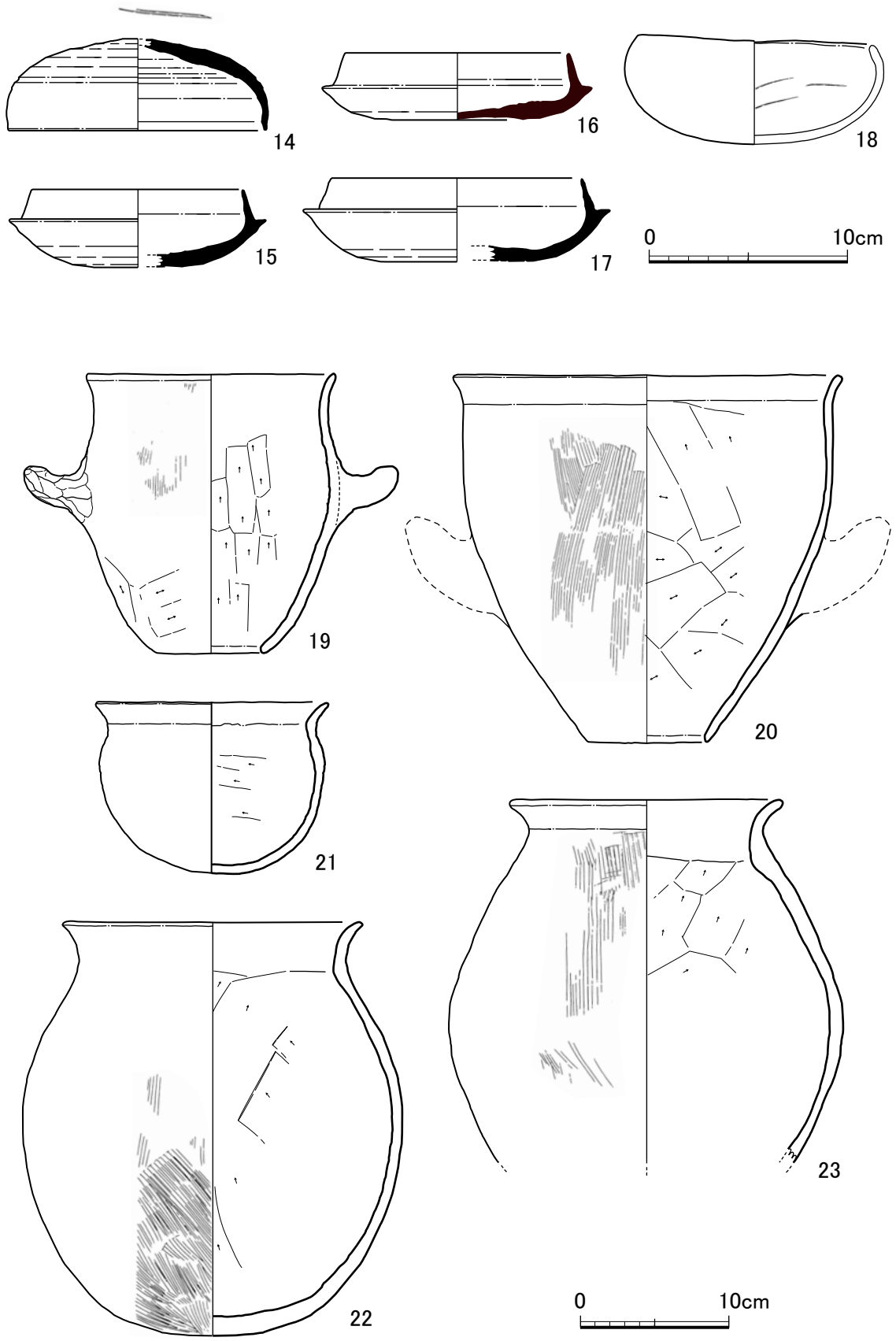


第７図　SD04出土土器実測図(1/3)

遺構面　出土遺物　（第８図、図版２・３・4）

須恵器

杯蓋　（14）　口径13.0cm、器高4.1cmを測る。回転ナデ調整され、天井部は回転ヘラ削りを行っている。天井部と口縁部との境に沈線が巡り、口縁端部の内側には稜を持つ。段の名残と思われる。



第 8 図　遺構検出面出土土器実測図（1/3・1/4）

天井部に約 4.5cm の長さの沈線があり、ヘラ記号の可能性もある。焼成は良好で焼き締まり、器肉は茶褐色を呈している。

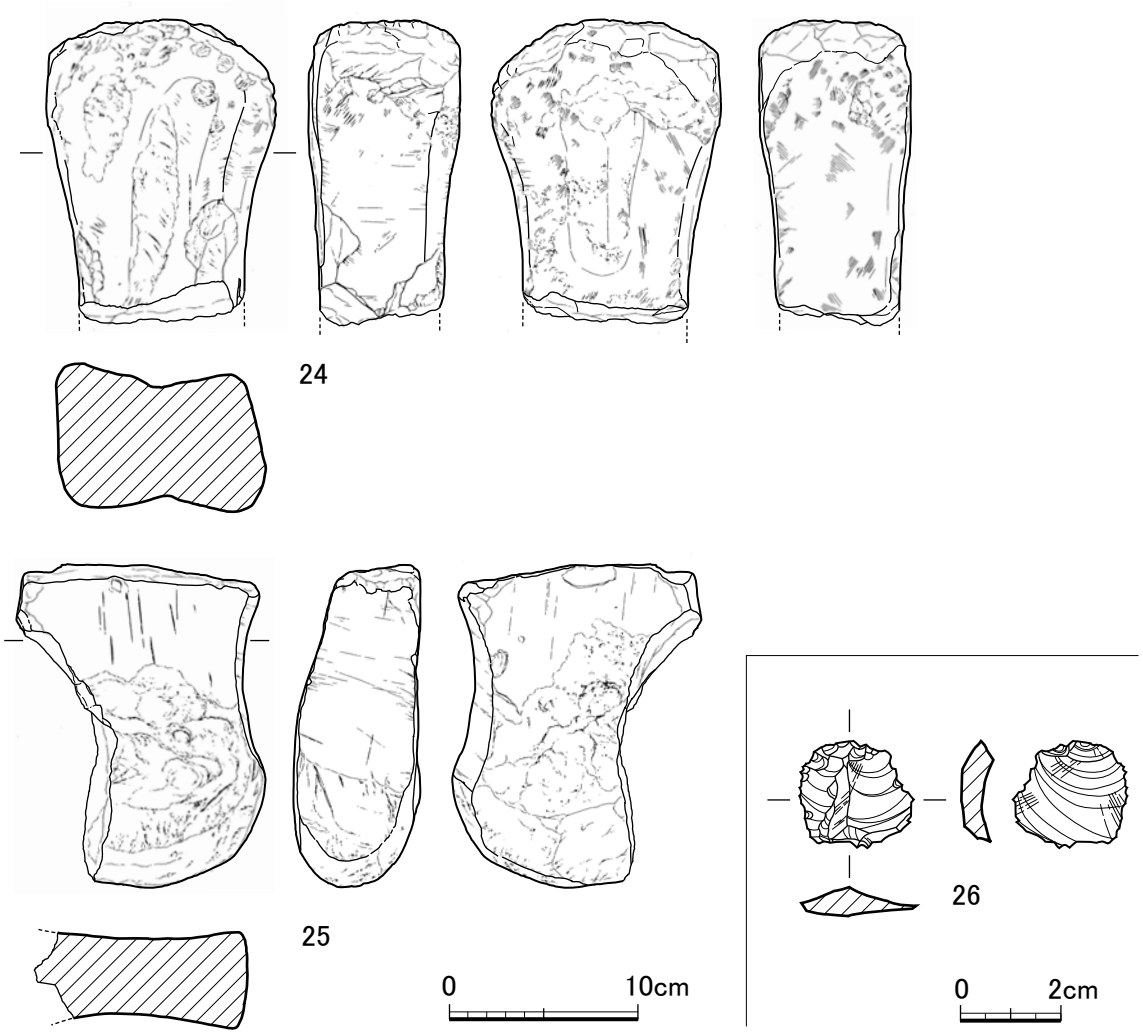
杯身　（ 15 ～ 17 ）　口径は 10.7 ～ 12.6cm。受部径 12.9 ～ 15.4cm を測る。16 の底部内面には当て具痕あり。３点とも外面底部から受部下まで回転ヘラ削りを施している。口縁部はいずれも長く作り内傾する。

土師器

椀　（ 18 ）　口径 12.0cm、器高 5.2cm を測り、ほぼ完形である。底部から口縁にかけ丸みをもって立ち上がり、丸く肥厚した端部はやや内側に傾く。内面にコテ当て痕状の刻みが観察される。

甑　（ 19 ・20 ）　19 は小型品で口径 16.6cm、器高 11.4cm を測る。口縁部は緩やかに外側へ開いて、体部内面は縦方向にヘラ削りし、体部外面は上位をハケ、下位をヘラ削りで調整している。20 は口径 26.2cm 器高 24.6cm。調整は 19 とほぼ同じだが体部外面の下位は磨耗している。体部外面に煤の付着が見られる。

甕　（ 21 ～ 23 ）　21 は口径 15.5cm、器高 11.4 ｃｍ。外面は被熱により橙色、にぶい赤橙色から暗灰色と変色している。調整は磨耗して不明。内面は横方向にヘラ削りを行っている。23・24 は



第 9 図　遺構検出面出土遺物実測図（1/4・2/3）

同じタイプの甕で口径は 20.0cm、18.2cm である。23 の器高は 27.8cm を測る。体部内面をヘラ削りし、外面はハケで調整を行っている。いずれも最大径は体部の中位にあって胴部が口縁より張り出している。

石製品　（ 24 ～ 26 ）　24・25 は砥石。上下面と側面を使用している。24 には敲打痕と細かい擦り痕が残る。石材はいずれも砂岩である。26 は黒曜石の剥片。縦×横×厚さは 2.1 × 2.25 × 0.6cm である。

表１　仲島本間尺遺跡出土土器法量表

No.	遺構	種類	器種	法量（cm）　①口径②器高③底径④受部径⑤胴部最大径
1	SD02	須恵器	杯蓋	①（13.6）　②3.4
2	〃	〃	〃	
3	〃	〃	杯身	①（12.2）　②2.4　④（14.3）
4	〃	〃	〃	②3.9
5	〃	〃	高杯	④（14.0）
6	〃	〃	はそう	⑤10.0
7	〃	土師器	甕	
8	SD04	須恵器	杯蓋	
9	〃	〃	〃	
10	〃	〃	杯身	①（11.6）　④（14.2）
11	〃	〃	〃	
12	〃	〃	高杯	①12.0　②9.1　③10.6　④14.3
13	〃	土師器	甕	
14	遺構検出面	須恵器	杯蓋	①（13.0）　②4.6
15	〃	〃	杯身	①（10.7）　②3.9　④（12.9）
16	〃	〃	〃	①（11.4）　②3.4　④（13.6）
17	〃	〃	〃	①（12.6）　②4.2　④（15.4）
18	〃	土師器	椀	①12.0　②5.2
19	〃	〃	甑	①（16.6）　②18.6　③（7.2）
20	〃	〃	〃	①（26.2）　②24.6
21	〃	〃	甕	①（15.5）　②11.4
22	〃	〃	〃	①（20.0）　②27.8　⑤（25.4）
23	〃	〃	〃	①（18.2）　⑤（26.4）
24	〃	石製品	砥石	タテ 16.0　ヨコ 12.0　厚さ 8.0
25	〃	〃	〃	タテ 17.1　ヨコ 13.1　厚さ 6.6
26	〃	〃	剥片	タテ 2.1　ヨコ 2.25　厚さ 0.6

（　　）内の数値は復元値を表す

Ⅳ．まとめ

仲島本間尺遺跡の概要を記したが、簡単にまとめておきたい。遺構としては溝が４条見つかっただけである。遺物も少ないが、比較的完形に近い土器も含まれる。溝から遺物が出土したのは、ＳＤ 02 とＳＤ 04 の２条で、ＳＤ 01 とＳＤ 03 からは出土していない。

ＳＤ 02 出土須恵器を見ると、杯蓋は比較的大きめで、天井部と体部の境に浅い凹線を持つもの（第６図２）と持たないもの（第６図１）がある。杯身も受部径が 14cm を越えるものや、口唇部内側に浅い段が付くもの（第６図４）と付かないもの（第６図３）がある。高杯の杯内面底部には当て具痕がある。ハソウは頸部がやや太いタイプである。これらの特徴から小田編年のⅢＡ期～ⅢＢ期に当たるものと考えられ、６世紀中頃から後半のものとすることができる。ＳＤ 02 はこの時期のものと考える。

ＳＤ 04 出土須恵器を見ると、杯蓋の口唇部内側に段を持つもの（第７図８）と持たないもの（第７図９）がある。杯身は受部径が 14cm を越えるものがある。しかし、立ち上がりの長さがやや短いもの（第７図 11）もある。高杯はＳＤ 02 出土高杯よりもやや浅くなり、立ち上がりもやや短めとなり、内面に当て具痕はない。これらのことから、ＳＤ 02 と同時期ながら、やや新しい様相を示すものが含まれると考えることができる。

遺構検出面出土土器も同時期と考えられる。

遺跡の性格については、出土土器が６世紀中頃から後半のものであることなどから、南 200 ｍほどにある仲島遺跡と関連が深いと判断できる。仲島遺跡は主に弥生時代から奈良時代にかけての遺構が多いが、住居跡など６世紀後半の遺構も多い。本遺跡も仲島遺跡もかつては洪水の多い低地に立地している。仲島遺跡が６世紀後半頃の集落部分、仲島本間尺遺跡がそこから伸びた排水溝や用水路の集まった部分と考えるのが良いかもしれない。

（参考文献）

『仲島遺跡』Ⅰ～ⅩⅡ　大野城市教育委員会　1980 ～ 2006

唐土遺跡

唐土遺跡本文目次

Ⅰ．はじめに …… 14
Ⅱ．調査の結果 …… 16
　1．　調査概要 …… 17
　2．　遺構と遺物 …… 17
Ⅲ．まとめ …… 25

唐土遺跡表目次

2．唐土遺跡出土土器法量表 …… 24
3．唐土遺跡出土土器数量表 …… 26

唐土遺跡図版目次

図版5　（1）唐土遺跡調査地全景（南から）
　　（2）唐土遺跡調査前
図版6　（1）唐土遺跡発掘区セクションA-B
　　（2）唐土遺跡発掘区セクションC-D
図版7　唐土遺跡出土遺物　（3～22）
図版8　唐土遺跡出土遺物　（25～35）
図版9　唐土遺跡出土遺物　（36～61）
図版10　唐土遺跡出土遺物　（65～74）

唐土遺跡挿図目次

第10図．唐土遺跡位置図（1/5,000）……15
第11図．遺構配置図（1/100）……16
第12図．発掘区セクション図（1/40）……17
第13図．ピット実測図（1/40）……18
第14図．ピット出土土器実測図（1/3）……19
第15図．遺構検出面出土土器実測図（1/3）……20
第16図．遺構検出面出土土器実測図（1/3）……21
第17図．遺構検出面出土遺物実測図（1/3）……22
第18図．遺構検出面出土瓦実測図（1/3）……23

Ⅰ．はじめに

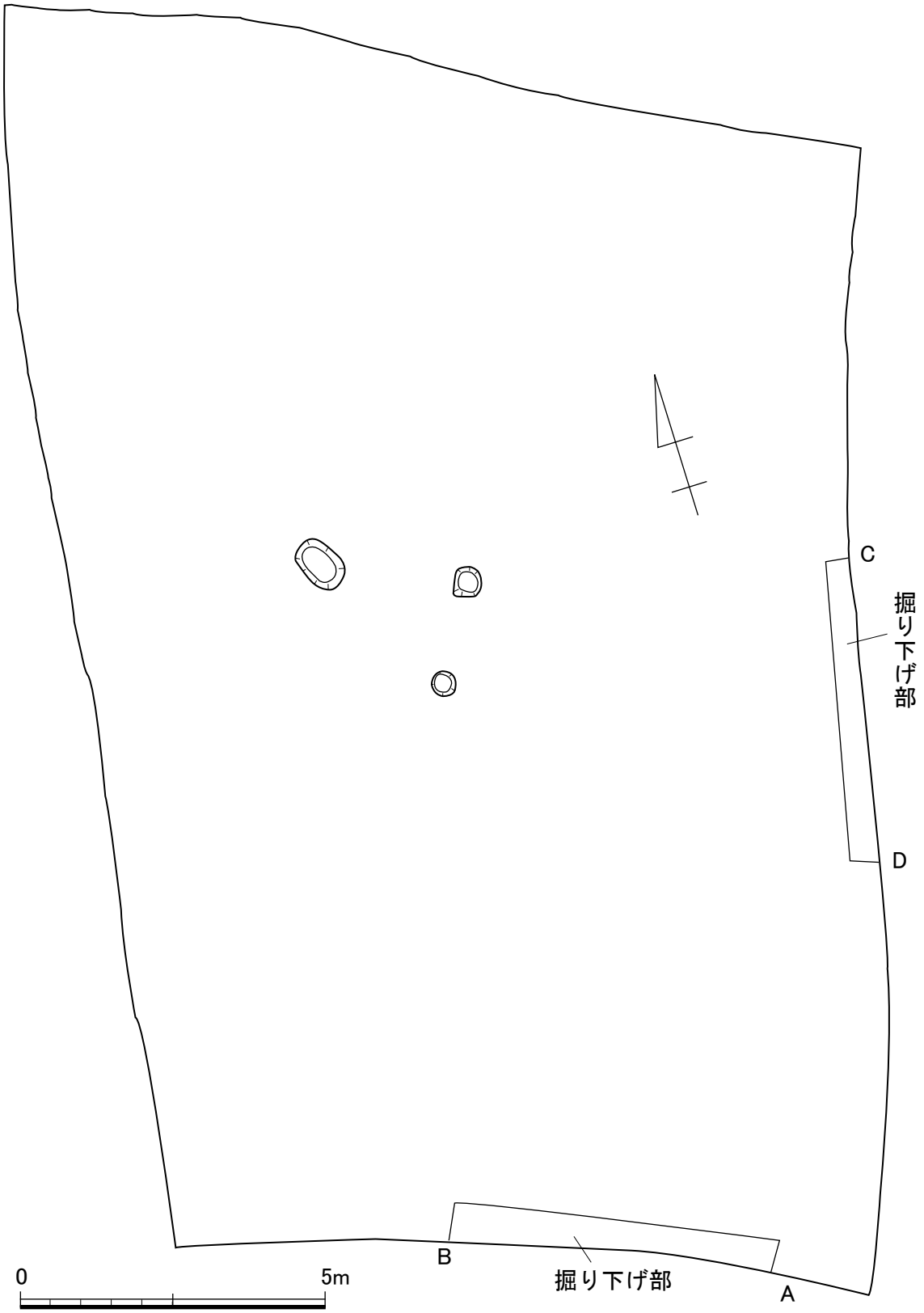
唐土遺跡は 1980 年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』には登録されていない遺跡で、共同住宅建設のため試掘調査を実施したところ見つかった遺跡である。『日本書紀』に天智天皇三年（西暦 664 年）に造られたと記され、特別史跡に指定されている水城跡の北約 200 m にある。調査する範囲は 200 ㎡という限られた面積であった。調査は 1989 年（平成元年）6 月 19 日から 6 月 30 日まで行った。

発掘調査は平成元年に技師向直也を中心にして実施したが、整理作業は 2006 年（平成１８年度）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

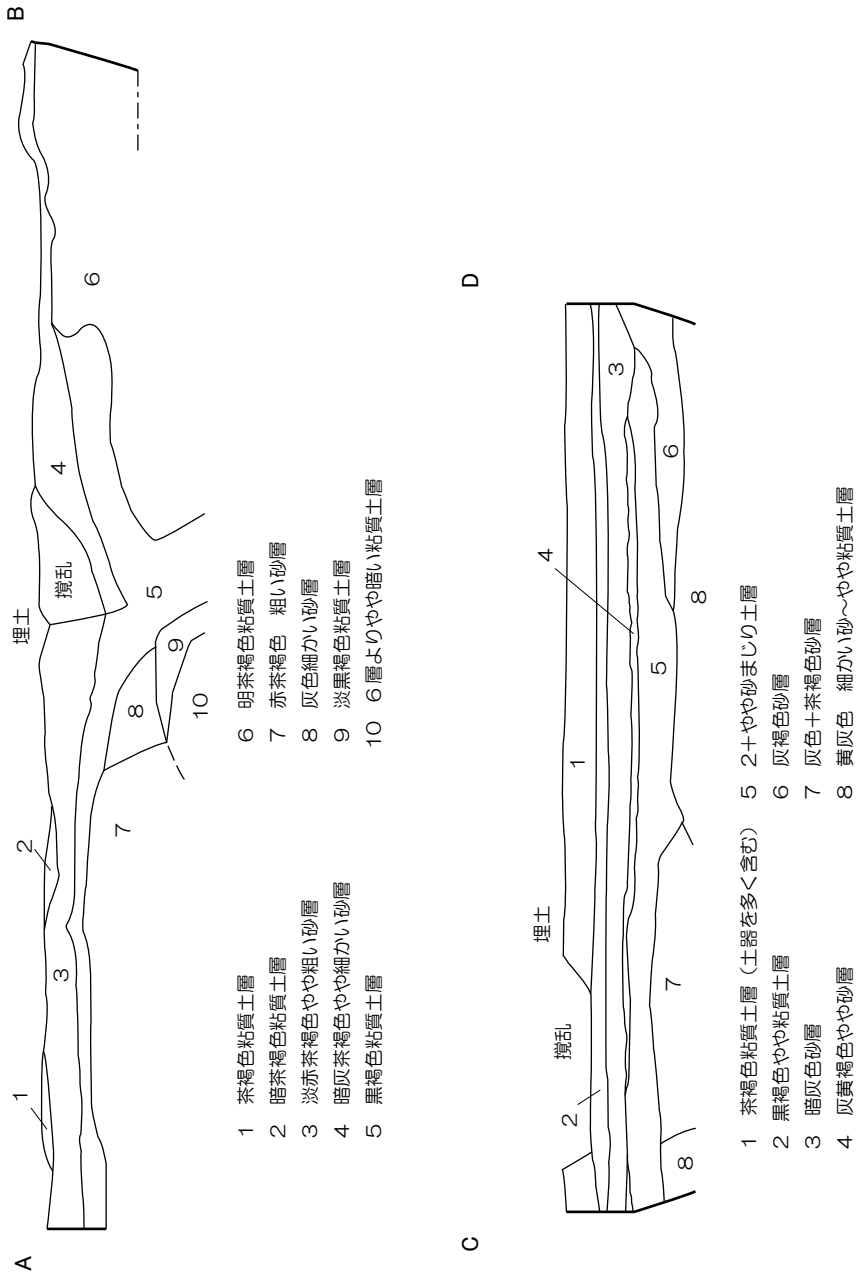
大野城市教育委員会	教育長	古賀　宮太
	教育部長	小嶋　健
	ふるさと文化財課長	舟山　良一
	文化財担当係長	中山　宏
	主査	徳本　洋一
	〃	石木　秀啓
	〃	丸尾　博恵
	主任技師	林　　潤也
	〃	早瀬　賢
	嘱託	井上　愛子
	〃	北川　貴洋
	〃	城門　義廣
	〃	岡田　裕之

発掘調査に際しては、調査費の負担のご協力を得た地権者に厚く感謝の意を表します。

第 10 図　唐土遺跡位置図(1/5,000)



第 11 図　遺構配置図 (1/100)



第 12 図　発掘区セクション図 (1/40)

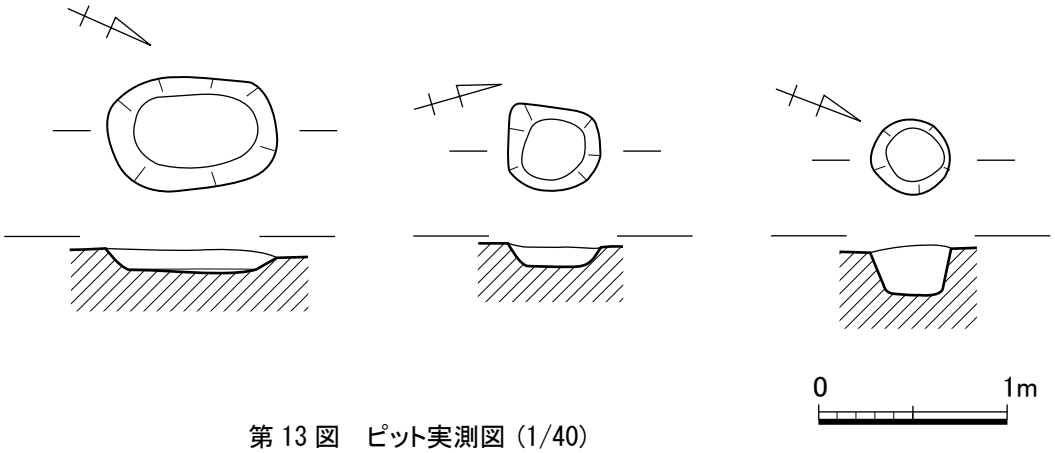
１．調査概要

調査面積は約 200 ㎡である。表土を除去後遺構面が検出されたが、須恵器と土師器が散乱している状況であった。この遺構面の中央部から幅 0.4 ～ 0.9m 大のピットが 3 基検出されたが、ほかには遺構は見つからなかった。出土遺物は奈良時代の須恵器が大半である。

２．遺構と遺物

ピット

SX01 ～ SX03



第 13 図　ピット実測図 (1/40)

最大のものは長楕円形を呈し、長さ 0.9m 幅 0.6m で深さ 0.1m を測る。他の 2 基はほぼ円形で、径が 0.4 から 0.5 m、深さ 0.1m と 0.25m の小穴である。3 基とも少量であるが奈良時代の須恵器と土師器を出土した。なお、ピット番号を示す記録が残っておらず位置関係を示しえないことをお断りしたい。

ピット１　出土遺物　（第 14 図、図版 7）

須恵器

杯蓋　（ 1・2 ）　1は小ぶりの杯蓋で口径 11.4cm、天井部は回転ヘラ切りし口縁端部内側に沈線を巡らせて端部は丸味をおびている。2 も同様な作りで口縁部付近に重ね焼きの痕跡が観察できる。口径は 14.0cm。

杯　（ 3 ～ 7 ）　高台の付くもの（ 3 ～ 5 ）と付かないもの（ 6 ～ 7 ）がある。3 は復元で口径 11.6cm を測り、断面方形の低い高台が貼り付く。体部はやや開き気味に立ち上がっている。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。4・5 はいずれも小さめの方形の高台が残る底部片で、体部の立ち上がりは直立気味である。高台径は推定復元で 4 が 8.0cm、5 が 9.0cm を測る。6 はやや開く口縁部片で推定復元口径は 12.2cm を測る。7 は底径 9.8cm に復元される底部片で、回転ヘラ切り後ナデ調整される。わずかに板状圧痕状のものが観察される。

ピット２　出土遺物　（第 14 図）

須恵器

杯　（ 8 ）　やや外側に開く方形の高台が貼付される。小片なので法量は不明だが、３とほぼ同じ形態のものだと考えられる。

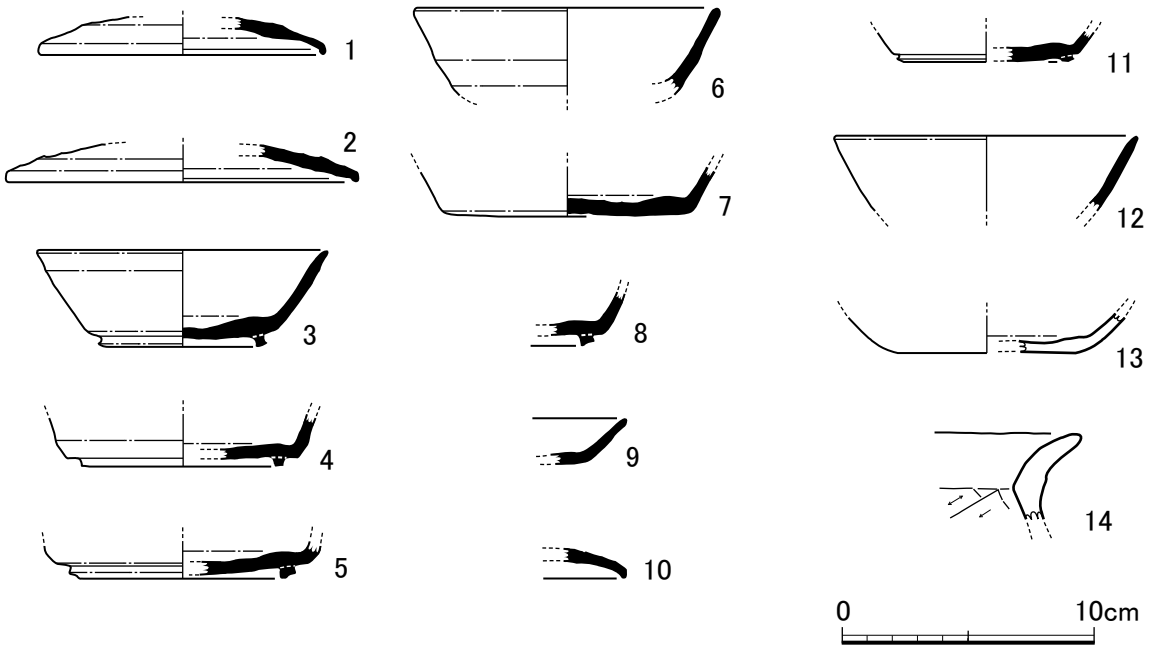
皿　（ 9 ）　器高 1.8cm 前後をはかる小片で体部は外反する。底部の切り離しは不明。

ピット３　出土遺物　（第 14 図、図版 7）

須恵器

杯蓋　（ 10 ）　小片なので法量は不明、口縁端部は断面三角形に作る。

杯　（ 11・12 ）　11 は低い高台が貼付される。高台径は復元で 7.0cm を測り底部外面はナデ調整



第 14 図　ピット出土土器実測図 (1/3)

である。12 は高台が付かないもので、口径 12.0cm に復元される口縁部片。

土師器

杯　（ 13 ）　口縁部は欠損しているが、底径 7.0cm に復元される。全体的に磨耗しており、細部の調整は不明であるが、体部の立ち上がりに丸みがあって、色調も橙色を呈す。おそらく磨きを施すタイプと考えられる。

甕　（ 14 ）　口縁部小片のため法量は不明。体部内面は手持ちヘラ削りされ口縁部との境界は明瞭な稜をつくる。

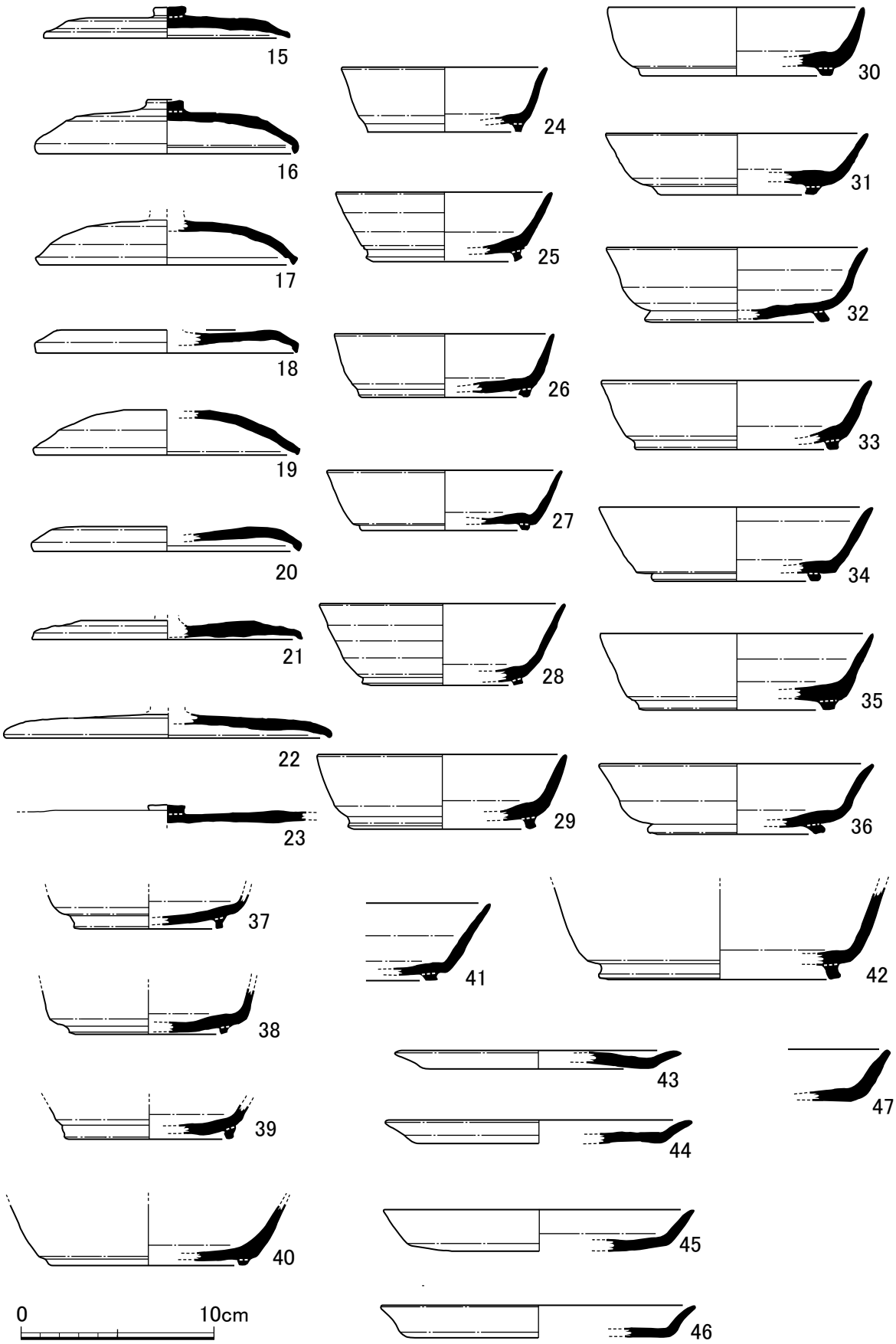
遺構検出面　出土遺物　（第 15・16・17・18 図、図版 7・8・9・10）

須恵器

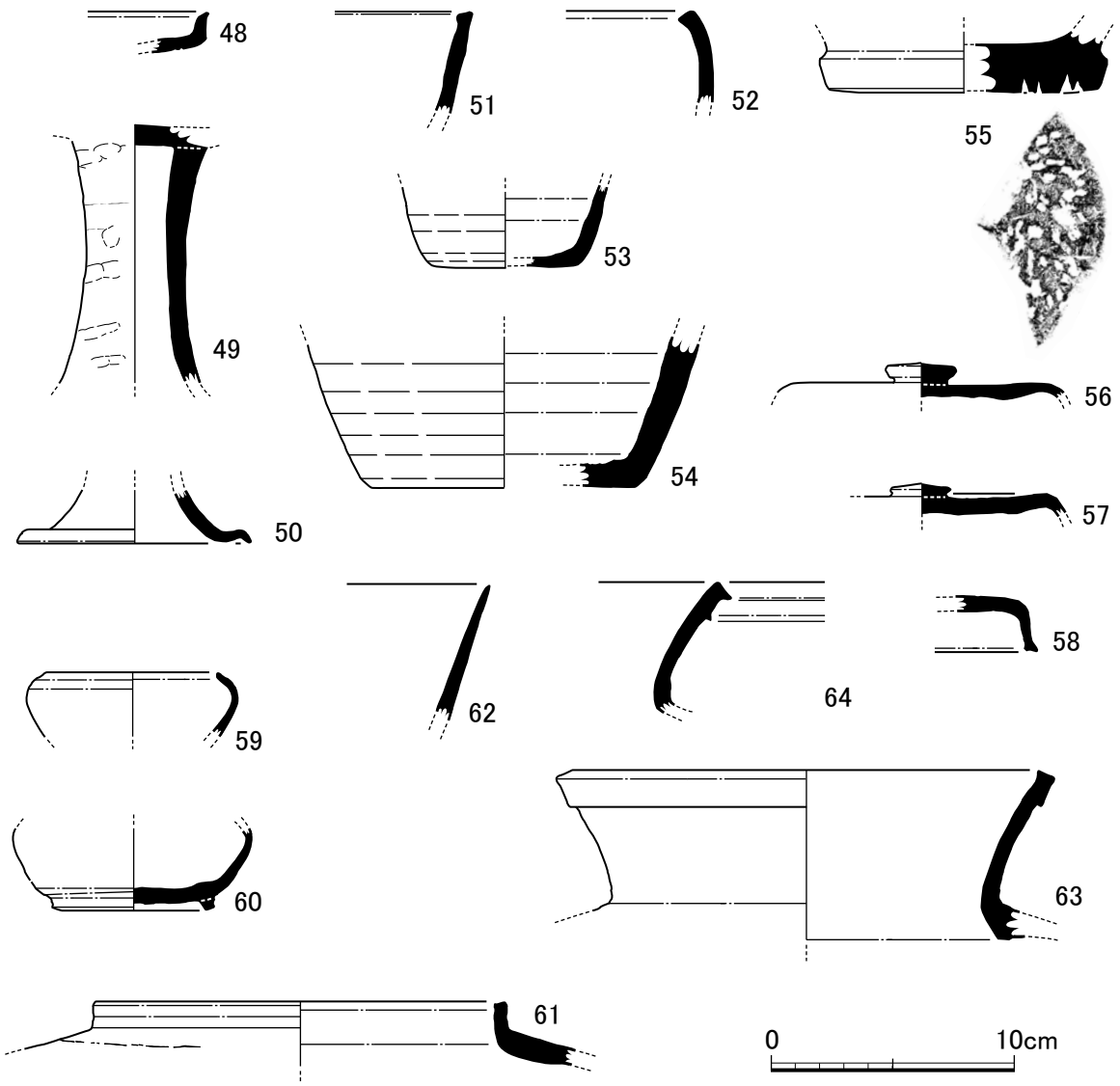
杯蓋　（ 15 ～ 23 ）　15 ～ 19 は口径 12.8 ～ 14cm のものである。15 が 12.8cm、19 は 14cm に復元される。15・23 には中央部がわずかに盛り上がった摘みが貼付されている。16 の摘みは中央部が凹みボタン状になっている。17・21・22 は摘みを接合した痕が観察され、同様の形態の摘みが貼付されていたと考えられる。

杯　（ 24 ～ 42 ）　24 ～ 26 は口径 11cm 前後、27 ～ 30 は 13cm 前後、31 ～ 36 は 14cm 前後に復元される。37 ～ 40・42 は底部片で、37 ～ 39 は高台径 7 ～ 9cm を測る。42 は 12.5cm を測り大型になると考えられる。40 の高台径は 10.0cm。残存部から底部外面の調整が観察できるものはナデないしは回転ナデ調整されている。

皿　（ 43 ～ 47 ）　43 ～ 46 は口径 14.8 ～ 16.4cm、器高 1 ～ 2.2cm を測る。43・44・46 は口縁が大きく外反し、45・47 は直線的に開いている。底部はいずれも回転ヘラ切りで、43・45・46 は切り離し後ナデ調整される。47 は大型の皿であるが、残存部が少ないため法量は不明。丁寧な作りで、底部外面から体部下位まで回転ヘラ削りを施している。



第 15 図　遺構検出面出土土器実測図 (1/3)



第 16 図　遺構検出面出土土器実測図 (1/3)

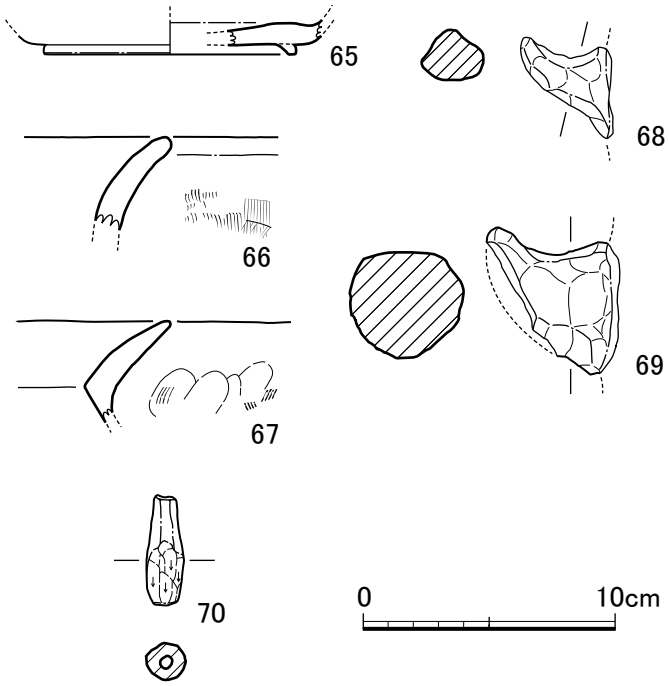
高杯　（ 48 ～ 50 ）　48 は高杯口縁部小片。底部は回転ヘラ削りを施している。49 は高杯の脚部、50 は脚底部のみ。49 は杯部に脚部を貼付け、ナデ調整されている。横方向に条痕が観察されるのは粘土紐の痕跡か。50 の残存部は回転ナデし、端部を断面三角形に作っている。

鉢　（ 51 ～ 54 ）　51 は小片で法量は不明だが、体部が直線的に開き、口縁端部を平坦に処理する。やや器壁が薄く、小型ないし中型の鉢と思われる。52 は内湾気味の口縁部をもち、内傾した端部は平坦に処理される。成形は回転ナデである。53・54 は平底で底径 6.1・10.8cm。いずれも底部から体部にかけ回転ヘラ削りを行っている。53・54 は 51 のような直線的に伸びる口縁形態を持つと思われる。

すり鉢（ 55 ）　厚く作られた円盤状の底部をもち、体部はやや外側に直線的に開くと考えられる。底部外面に径 3 ～ 5mm の刺突による穴が多数あるが、穴は深いところで 8mm ほどあり、内面までは貫通はしていない。

壺蓋　（ 56 ～ 58 ）　56・57 はやや扁平気味の宝珠形摘みをもつ。天井部は精粗はあるがいずれも回転ヘラ削りされ、56 には摘み全体に自然釉が掛かる。58 は口縁部付近の小片。天井部から口縁部の境まで回転ヘラ削りを施し、口縁端部は平坦に作っている。

壺　（ 59 ～ 61 ）　59 は口径 7.7cm に復元される。口縁部は内湾し、口縁部外面に自然釉が掛かっている。60 は高台径 6.7cm。底部は回転ヘラ切りし、体部は回転ナデ調整される。61 は口径 17.1cm を測る短頸の壺で、口縁は真直ぐ上方に立ち上がる。肩部に重ね焼きの痕が観察できる。蓋をかぶせて焼いたものであろう。



第 17 図　遺構検出面出土遺物実測図 (1/3)

平瓶？　（ 62 ）　口縁部の小片で口径は不明だが、10 ｃｍ以下に収まると思われ、直線的に立ち上がり端部にいくほど器壁は薄くなっている。口縁部のみの破片なので器種は正確には特定しえないがここでは平瓶としてあげた。

甕　（ 63・64 ）　63 は口径 20.5cm を測り、緩やかに外側へ開く。端部は断面四角形に作る。頸部から肩部にかけて叩きを行った痕跡がわずかに観察されるが､叩きの種類は不明。55 は口縁部小片。口縁端部と直下に突起状の突帯を巡らしている。

土師器

杯　（ 65 ）　底部片で、高台径は 9.0cm に復元される。小さめの角高台が貼付され、胎土は橙色を呈し、白色砂粒を少量混入するが精良である。

甕　（ 66･67 ）　66 は緩やかに外反する口縁をもつ。口縁部外面に縦方向のハケ調整を行っている。67 は口縁部を外反させ、体部との境を指ナデで調整している。外面にわずかにハケ調整の痕跡が観察される。体部内面はヘラ削りされ、口縁部と明瞭な稜を作る。

把手　（ 68・69 ）　大小２つの把手で、甕ないしは甑のものが剥落したと考えられる。

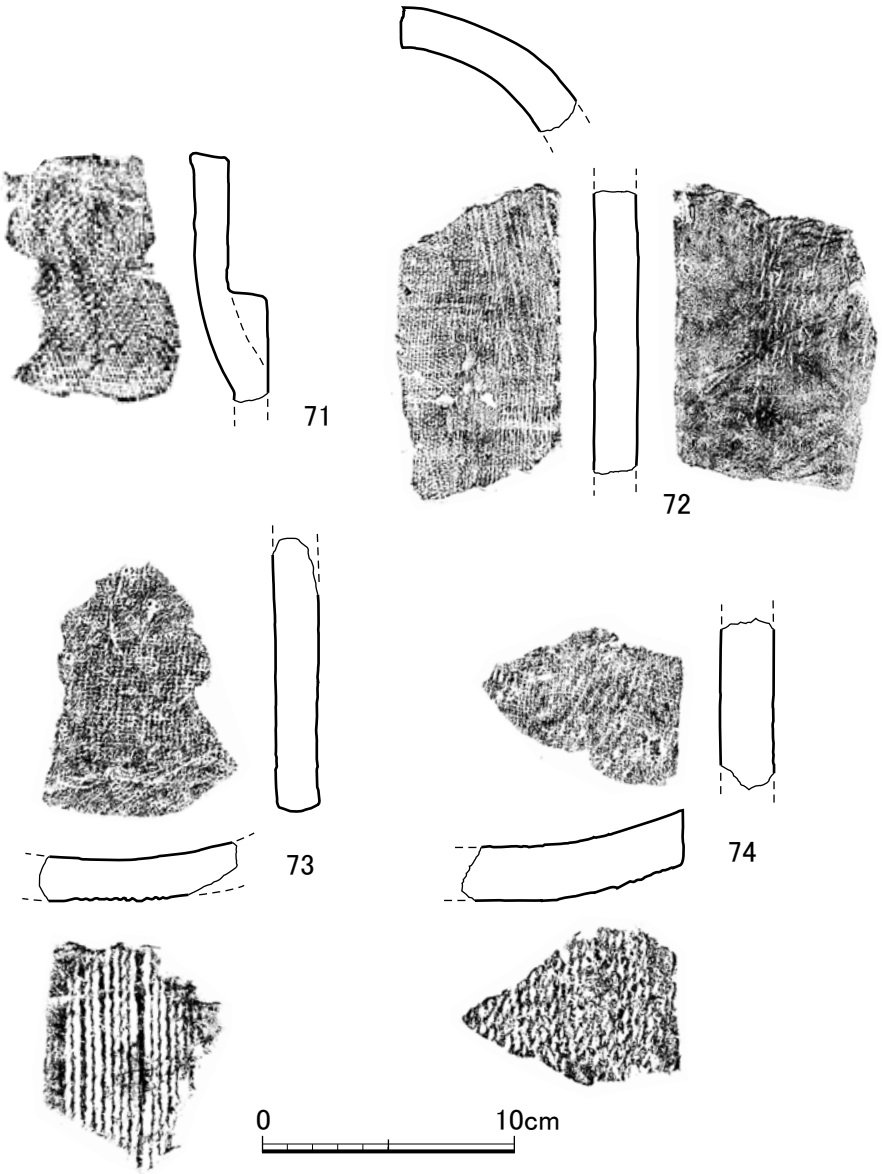
土製品

土錘　（ 70 ）　縦 4.4cm を測る。長軸方向に緩く面取りされ、一部ヘラ削り調整をおこなう。焼成は良好で還元焼成されている。

瓦

丸瓦　（ 71・72 ）　2 点とも内面に布目痕あり。71 は玉縁を貼り付ける。外面の叩きは不明。72 は外面に縄目叩きの痕が観察され、叩き痕を一部ナデ消している。

平瓦　（ 73・74 ）　いずれも凸面に縄目叩きを行い、内面に布目痕あり。74 の破断面はヘラ削りされている。



第 18 図　遺構検出面出土瓦実測図 (1/3)

表２　唐土遺跡出土土器法量表

No.	遺構	種類	器種	法量（㎝）①口径②器高③底径④高台径⑤胴部最大径
1	P-1	須恵器	杯蓋	①（11.4）
2	〃	〃	〃	①（14.0）
3	〃	〃	杯身	①（11.6）②3.85④（6.8）
4	〃	〃	〃	④（8.0）
5	〃	〃	〃	④（9.0）
6	〃	〃	杯	①（12.2）
7	〃	〃	〃	③（9.8）
8	P-2	〃	杯身	
9	〃	〃	皿	
10	P-3	〃	杯蓋	
11	〃	〃	杯身	④（7.0）
12	〃	〃	杯	①（12.0）
13	〃	土師器	〃	③（7.0）
14	〃	〃	甕	
15	遺構検出面	須恵器	杯蓋	①（12.8）②1.6
16	〃	〃	〃	①（13.6）②2.8
17	〃	〃	〃	①（13.6）
18	〃	〃	〃	①（13.6）
19	〃	〃	〃	①（13.8）
20	〃	〃	〃	①（14.0）
21	〃	〃	〃	①（14.0）
22	〃	〃	〃	①（17.0）
23	〃	〃	〃	
24	〃	〃	杯身	①（10.7）②3.4④（8.0）
25	〃	〃	〃	①（11.2）②3.6④（8.0）
26	〃	〃	〃	①（11.4）②3.3④（8.6）
27	〃	〃	〃	①（12.2）②3.1④（8.7）
28	〃	〃	〃	①（12.8）②4.25④（8.4）
29	〃	〃	〃	①（13.0）②3.9④（9.8）
30	〃	〃	〃	①（13.2）②3.6④（9.9）
31	〃	〃	〃	①（13.6）②3.2④（8.2）
32	〃	〃	〃	①（13.6）②3.9④（9.6）
33	〃	〃	〃	①（14.0）②3.6④（10.6）
34	〃	〃	〃	①（14.2）②3.9④（8.8）
35	〃	〃	〃	①（14.2）②4.0④（10.2）
36	〃	〃	〃	①（14.2）②3.7④（9.2）
37	〃	〃	〃	④（7.7）
38	遺構検出面	須恵器	杯身	④（8.2）
39	〃	〃	〃	④（8.8）
40	〃	〃	〃	④（10.4）
41	〃	〃	〃	②4.05
42	〃	〃	大杯	④（12.5）
43	〃	〃	皿	①（14.8）②0.95③（11.4）
44	〃	〃	〃	①（16.0）②1.2③（13.1）
45	〃	〃	〃	①（16.1）②2.2③（13.3）
46	〃	〃	〃	①（16.4）②1.7③（13.8）
47	〃	〃	大皿	②2.7
48	〃	〃	高杯	
49	〃	〃	高杯	
50	〃	〃	〃	③（9.6）
51	〃	〃	鉢	
52	〃	〃	〃	
53	〃	〃	〃	③（6.1）
54	〃	〃	〃	③（10.8）
55	〃	〃	すり鉢	③（11.0）
56	〃	〃	壺蓋	
57	〃	〃	〃	
58	〃	〃	〃	
59	〃	〃	小壺	①（7.0）⑤（8.8）
60	〃	〃	〃	④6.7
61	〃	〃	壺	①17.1
62	〃	〃	平瓶？	
63	〃	〃	甕	①（20.5）
64	〃	〃	〃	
65	〃	土師器	杯	④（9.9）
66	〃	〃	甕	
67	〃	〃	〃	
68	〃	〃	把手	
69	〃	〃	〃	
70	〃	〃	土錘	タテ4.4　ヨコ1.95　厚さ1.4
71	〃	瓦類	丸瓦	厚さ2.1
72	〃	〃	〃	厚さ1.65
73	〃	〃	平瓦	厚さ1.6
74	〃	〃	〃	厚さ2.1

（　）内の数値は復元値を表す

Ⅳ．　まとめ

唐土遺跡の概要を記したが、遺構としてはピットが３基のみで、これから遺跡の性格について考えるのは難しい。一方遺物は遺構の数に比べて多い。しかし、その出土状況は特異である。遺構検出面にあたかも集めたかのような観があったからである。このようなことから、遺物の分析を行って今後本遺跡の性格を考える上での参考にしたい。

１．出土遺物について

ピットと遺構検出面の土器の種類と破片数は下記の表 3 で示すとおりである。土器には完形品で出土したものは１点もなく、すべて破片である。全ての破片を器種ごとに分け接合の可能性を試みた結果、杯身で接合するものは約３%、杯蓋では約 1% であり完形になるものは無かった。また接合した土器の断面を観察すると、破断面が新しいものとそうでないものの比率は半々であった。このことから半数は埋没時、ないしはそれ以前の割れと推察できる。遺構検出面からの出土土器は須恵器が 88% を占め土師器はわずか 12% であった。

次に、出土土器それぞれの特徴からピットと遺構検出面の年代を推定してみたい。

年代を推定し得る資料として須恵器の杯蓋・杯身、土師器の杯・甕が上げられる。3 つのピットから出土した土器は表 3 の A で示すように総数で 116 点と少ない。その中で須恵器の杯蓋を見ると天井部の調整にヘラ削りは見られず、ヘラ切り離しのままであった。また口縁端部は断面がほぼ三角形になっているが、やや丸みを帯びている。杯身の高台は５点とも断面が四角形になっており、底部の内側に貼付される。そのうちの１点は底部際が丸くなっている。土師器では小片であるが古代の大宰府で多く出土例がある杯ｄが出土している。磨耗しているため杯ｄの磨きは確認できない。甕は体部内側を削り、口縁部と体部の境の稜が明瞭である。

遺構検出面では表 3 の B にあげているように 6,308 点と大量の須恵器を出土している。そのなかで杯蓋の口縁端部形状、杯身の高台形・高台貼付位置等が、ピット出土の須恵器の特徴と近似している。杯蓋には天井部の調整はヘラ削りされるものが約 1 割程度あり、杯身では高台が底部際に付くものが少数存在している。土師器では精製品の高台付杯ないし椀が 1 点だけ出土している。磨耗して磨きは不明だが、赤橙色を呈する底部片である。甕はピット出土のものと同タイプのものが多く、内面を削り外面にハケ調整が残っている体部の破片資料がほとんどである。

以上のことから年代を考察すると、須恵器杯身は大宰府編年のⅢ期（８世紀前半）以降に見られる特徴があり、杯蓋ではⅣ期（８世紀中頃～後半）の様相が見てとれる。また、土師器の杯ｄは大宰府に多く出土例があって、Ⅳ期から出現する。甕の口縁部が「く」の字に屈曲し内側に明瞭な稜をもつ特徴は 9 世紀前半まで続く。また上記で述べたようにピットとその上層の遺構面との間に器種構成・調整などの特性に差は見られない。すなわち、両者は時期的にほぼ同じと推察でき、ともにⅣ期を中心にした時期に収まると考えられる。

唐土遺跡は出土遺物がすべて破片で、その中でも供膳具が圧倒的多数を占めており、さらに須恵器

の出土数が土師器に比べてはるかに多いという特徴をもっている。しかし、須恵器と土師器の出土比率については、官衙や一般集落といったように遺跡の性格や時期によって変わってくることも想定されるので、ここでは出土土器に占める須恵器の割合が非常に多いということに止める。

２．今後の課題

唐土遺跡は水城跡から博多側へ約 100 mほど離れた場所にある。また、水城西門からほぼ直線的に鴻臚館まで続いていた官道にも近い。遺跡名の元になった小字名は唐土であるが、時代は不明ながら唐土屋敷があったという地元の言い伝えがある。今回の調査地点で遺物・遺構が発見されたことから、周辺の開発の際には試掘調査を行っているが、他の場所では両者とも見つからない。極めて狭い範囲に土器類が集中していたことがわかる。当遺跡周辺は須恵器窯跡群で有名な牛頸窯跡群の北東端に当たり､近くの丘陵にも須恵器の散乱が見られ窯跡の存在が推定できる。このことから、窯で焼き上げた須恵器を集積して、不要なものを廃棄した場所とも考えられるが、住居跡などのその他の遺構が見つからないこと、周辺の試掘調査でも遺構が見つからないことから、その想定も難しい。奈良時代の何らかの建物も同様に想定しずらい。

以上のように、当遺跡については不明な点が多い。西門を通る官道は８世紀前半に主要な道路であったが、８世紀後半には東門を通るルートに主要な役割を譲ったとの説もある。唐土遺跡は８世紀中頃から後半頃の土器が多いことから、これらとの関連も含め遺跡の果たした役割を追求していかなければならない。

表３　唐土遺跡出土土器数量表

A 遺構

	須恵器									土師器							集計
器種	杯(高台有)	杯(高台無)	杯口縁	高杯	皿	蓋	壺類	器種不明	小計	杯(高台無)	蓋	供膳具	甕	煮炊具	器種不明	小計	
P-1	5	2	4		2	7	1	11	32		1	13	2	3		19	51
P-2	1			1	1	4	1	12	20					6	14	20	40
P-3	3		1			2		8	14	1			3	5	2	11	25
集計	9	2	5	1	3	13	2	31	66	1	1	13	5	14	16	50	116

B 遺構検出面

	須恵器												
器種	杯(高台有)	杯(高台無)	杯口縁	高杯	皿	蓋	壺蓋	壺	甕	鉢	不明品	器種不明	小計
破片数	1,102	281	454	43	99	1,028	22	326	185	14	1	2,753	6,308

	土師器								弥生土器	瓦類	石	土製品	鉄製品	白磁	集計
器種	杯(高台有)	杯口縁	蓋	供膳具	高杯	煮炊具	器種不明	小計							
破片数	20	5	6	471	4	19	193	718	15	113	15	1	3	1	7,174

※年代を推定するにあたっては太宰府市で使用されている土器編年をもちいた。また、資料の分析等で山村信榮氏（太宰府市）にご教示いただいた。

（参考文献）

１．山本信夫 「統計上の土器－歴史時代の土師器の編年研究によせて－」『乙益重隆先生古希記念論文集』1991

２．山村信栄「大宰府周辺の道路状遺構」『古代交通研究』第 2 号　1993

３．山本信夫 「古代前期の煮炊具－筑前・筑後・豊前・豊後・肥前－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４煮炊具』1996 古代の土器研究

４．中島恒次郎 「大宰府における土師器甕の変遷」『大分・大友土器研究会論集』2001

５．「宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡編－」『太宰府市の文化財第 10 集』1992

６．「谷川・池田・池ノ上遺跡」『大野城市文化財調査報告書第 51 集』1998

７．「大宰府佐野地区遺跡群 14 －前田遺跡第４・５・６次調査－」『太宰府市の文化財第 63 集』2002

８．山村信榮 「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学第 68 号』1993 九州考古学会

９．山村信榮 「古代道路の様相－大宰府管内の場合－」『古代文化第 47 巻 4 号』1993 九州考古学会

図　　版

仲島本間尺遺跡

図版 1

(1)　仲島本間尺遺跡調査地全景（南から）

(2)　仲島本間尺遺跡調査前（南から）

図版 2

3

12

6

13

7

14

仲島本間尺遺跡出土遺物（3 ～ 14）

14

17

15

18

16

19

仲島本間尺遺跡出土遺物（14 ～ 19）

図版 4

20

23

21

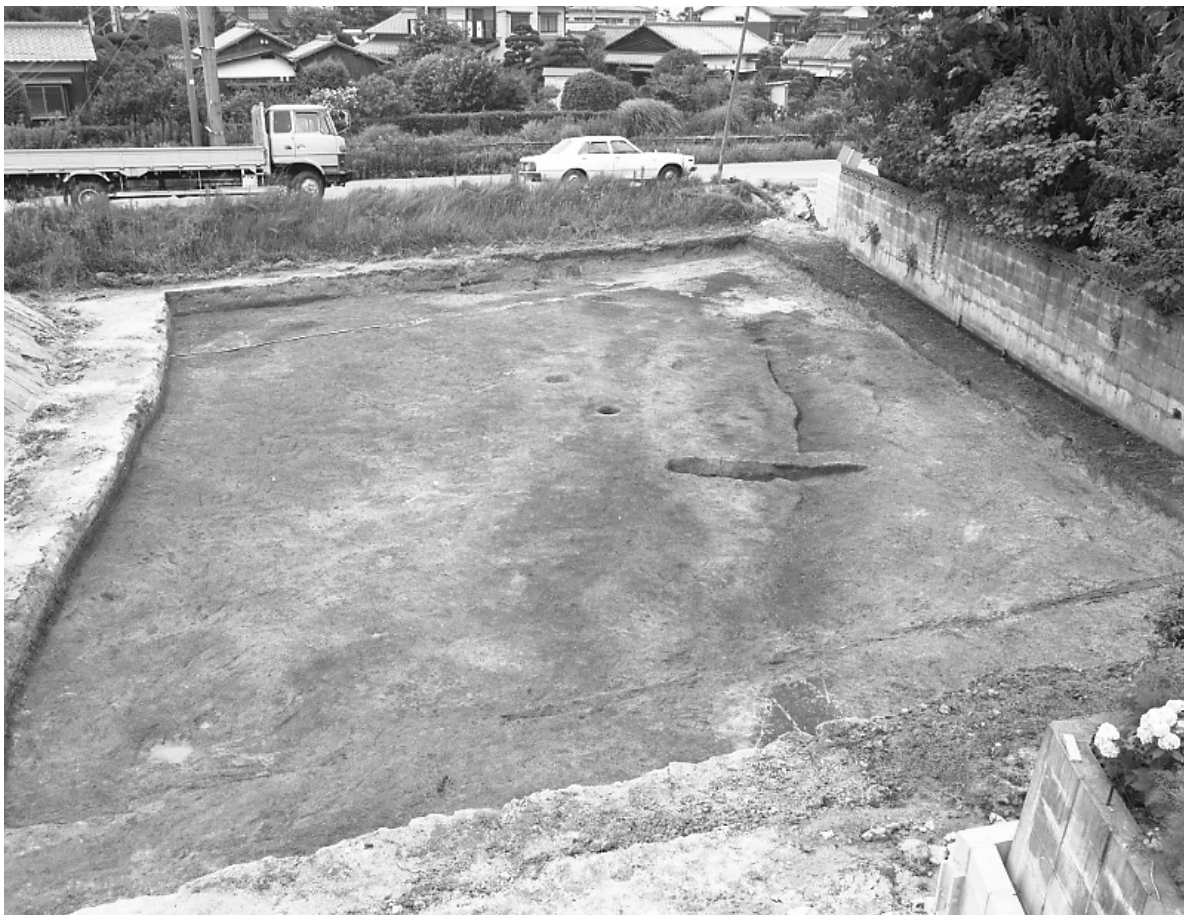
24

22

25

仲島本間尺遺跡出土遺物（20 ～ 25）

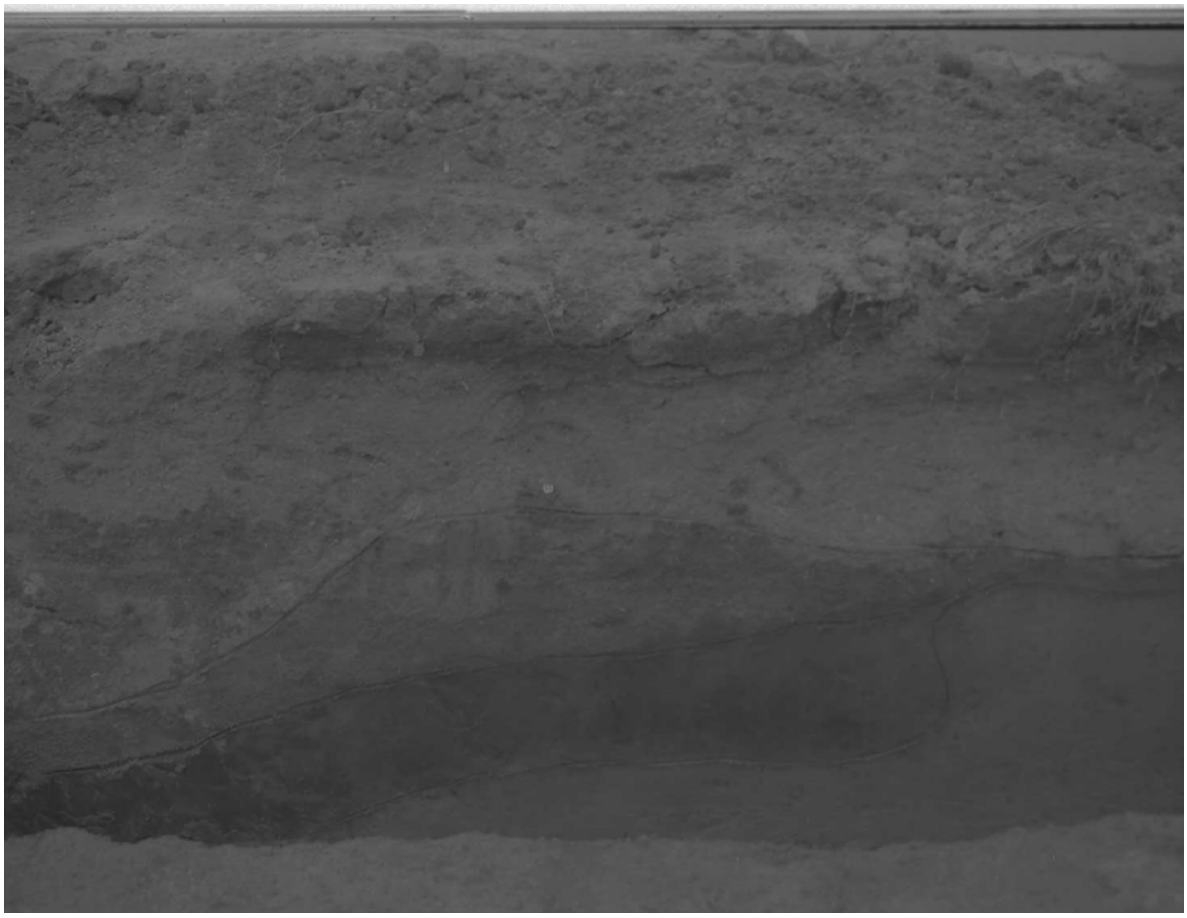
唐土遺跡



(1)　唐土遺跡調査地全景（南から）

(2)　唐土遺跡調査前

図版 6



(1)　唐土遺跡発掘区セクション A-B

(2)　唐土遺跡発掘区セクション C-D

3

15

13

16

17

14

22

唐土遺跡出土遺物（3 ～ 22）

図版 8

唐土遺跡出土遺物（25 ～ 35）

唐土遺跡出土遺物（36 ～ 61）

図版 10

65

72

70

73

71

74

唐土遺跡出土遺物（65 ～ 74）

報告書抄録

ふりがな	なかしまほんげんじゃく・もろこしいせき
書名	仲島本間尺・唐土遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	舟山　良一
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816-8510　福岡県大野城市曙町二丁目2番1号　電話092(501)2211
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もろこしいせき 唐土遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 しもおおり 下大利			33°30′ 53″	130°28′ 57″	1989.6.19 ～ 1989.6.30	200㎡	共同住宅
なかしまほんげんじゃく 仲島本間尺 いせき 遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 なかはた 仲畑			33°33′ 20″	130°28′ 02″	1991.7.25 ～ 1991.9.30	200㎡	事務所

所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
唐土遺跡	集落遺跡	奈良	ピット3口	須恵器・土師器石器・瓦	
要約	検出遺構はピット３口に留まるが、遺構検出面に撒き散らかしたような状況で須恵器・土師器・瓦が散乱していた。しかもそれらは小破片となっていた。量としてはパンコンテナで８箱分である。遺跡は特別史跡水城跡の北200mに位置し、遺跡名とした小字が唐土と呼ばれていた地域である。このような地区から奈良時代の土器が小破片となって散乱していた状況からどのような歴史的背景があるのか解明をめざさなければならない。なお、周辺の開発に伴って試掘調査を行っているが、本地区以外に遺構は見つかっていない。				
仲島本間尺遺跡	集落遺跡	古墳	溝４条	須恵器・土師器	
要約	遺跡は中国「新」の貨幣である貨布や8世紀の人面墨書土器が出土した仲島遺跡の北 200 m に位置している。検出遺構は溝4条だけで、遺物も須恵器・土師器を中心にパンコンテナ2箱分であるが、6世紀後半の完形に近い土器も数個ある。このような土器の存在から仲島遺跡との関係を明らかにしていくことが本遺跡の性格解明のうえで必要である。				

大野城市文化財調査報告書

第72集

平成19年3月31日

発行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2－2－1

印刷　㈱川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6－6－41

図書
19.5.28
九州国立博物館